
帰郷

LAMP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰郷

【Nコード】

N4158L

【作者名】

LAMP

【あらすじ】

久しぶりの帰郷。歓迎してくれる仲間と、そうではない知り合い達。彼、和也には故郷から嫌われた理由があった…

プロローグ

懐かしいはずの故郷を、俺はずっと恐れていた

帰りたい…でも、帰れない。そう思っていたから

物語は本当に、俺の知らないところで動いていて

気づいた時にはもう、どうしようもないところまで描かれていたんだ

光と影。正義と悪。簡単に分けられる二つのもの

俺は故郷にとって影になった。言い方を変えれば悪にすらなってしまうた

『こんなはずじゃなかった、こんなはずじゃなかったんだ!』

あの日、何度も繰り返した言葉を、あいつはまだ覚えているだろうか

それとも、取るに足らないことと、もう忘れてしまったのだろうか
3年ぶりの故郷は、どんな顔で俺を迎えてくれるだろう

怒った顔を見せるだろうか？それとも、仕方ないと慰めてくれる
だろうか？

けれど、あいつなら…あいつなら、きっと笑顔で迎えてくれる

『久しぶり!!』

そう声をかけてくれるはずだ

誰に言えるでもないその言葉を、俺は自分に言い聞かせてきた

そうでもしなければ、こっちでやっていく力がなかった

心の支え

そう、俺はずっとそれを支えにしてきたんだ

お帰りって、言ってくれる仲間

ただいまを言おうって

1話目〜出発前〜

「そうか、帰るのか」

「はい…ゼエゼエ…休暇期間を…ゼエゼエ…利用して」

汗だくになった体に、水分を流し込む。
それでもしなければ、立っていられなかった。

「何だよ、せつかくイイトコロ に連れて行ってやるつもりだ
の」

「すいま…せん…」

俺はそんな状態なのに、目の前の男はピンピンしている。
情けない…あまりにも高すぎる彼の壁に、俺は正直悔しさすら湧
いてこなかった。

試合後のクールダウン。彼にとっての軽いジョギングにすら、俺
は全くついていけなかったんだ。

「でも…祐輔さんは…帰らないんですか…」

「俺みたいなスターは、休みだからって簡単には帰れないんだよ」

しゃべるな、少し休め、そう一喝されてしまった。

今日のゲームだってそうだ。彼に何度、子供のようにあしらわれ
ただろうか。

「全く、近頃の若者は鍛え方が足りないなあ」

「若者って…祐輔さんも、まだ26歳じゃないですか…ゲホゲホッ!？」

「だから、しゃべるなつての!!」

優しく背中をさすって貰う。これで同じプロ選手なのだから、恥ずかしくなってしまう。

今まで以上に努力しないと、彼には一生勝てそうにないな。

「まあ、こっちに来てから始めての帰郷だろうし。ゆっくりしてきな」

「はい…色々ありがとうございます」

同じ国、同じ県で育った彼が居なければ、俺はこの国に負けていただろう。

あの頃の俺は、それぐらい弱っていたから…
彼がいたから、今の自分がある。それぐらい彼には、頭があがりそうにない。

「じゃあ、今度会うのは年明けの代表合宿かな？」

「俺が選ばれれば…ですけどね」

カッカッカ、そう大笑いして、彼は俺の背中に平手を打つ。

正直、泣くほど痛い。

「いい加減自分の力認めろって。そうでもなきや、『貴婦人の守人』なんて、ファンが言ってくれなくなるぞ」

「『悪魔の心臓』から言われるとは、光栄至極です」

彼はまた、カッカッカ、と笑い俺の背中をぶつ。

帰るんだ…俺は、故郷へ帰るんだ。

これが3日前に、俺に起こったことである。

2話目〜到着〜

「ふあゝ、やっとここまで着いた」

昨日？一昨日？なのがよく分からないが、15時頃に現地出発。

それから、地元空港に着いたのが13時頃か…やっぱり結構かかるな。

3年ぶりの日本。あつちとは違う風景、風の匂い。

「帰ってきたんだな…」

涙が流れそうになるのは、やはり自分が日本人だからなんだろう。

祐輔さんも言ってたもんな。

「1年に一回でいいから、里帰りはしろ。そうすりゃ自分つてもんが見えてくるから」

意外と本当だったんだな。あの人いつもバカばかりなのに、たまに良いこと言つもんだよな。

そんなことを考えながら空港のロビーにまで来ると

「いつてえ！！」

誰かにまた、背中をいきなり叩かれた…その痛さに顔をしかめつつ、振り返ると懐かしい顔が並んでいた。

「よく帰って来たな、和也。元気そうだなによりだぜ」

「今のイタそー…大丈夫、和也君？」

「別に心配いらなくて、結衣。和也なんだし」

武に結衣、彩花。同じ高校に通った友人達だ。

「なんで、お前等ここにいるの？」

「和也君のお母さんから連絡が来たの」

ふふっ、と思い出したように笑う結衣。その意味を彩花が続ける。

「私忙しいから、誰かあの馬鹿迎えに行って、だってよ。愛されてるねえ、和也」

「あの親〜!!」

息子の3年ぶりの帰国だったのに。ものぐさしやがって!!

「突然で困ったよね〜、結衣」

「えっ!? あっ…うん、確かに急だったよね…」

なんか小声で、メツとか言う結衣を可愛いなあ…と眺めてしまう。

高校の頃も、こうだったんだよな。僕と武とアイツが馬鹿やって、結衣は心配してくれて、またその姿が可愛くて…彩香は冷静にそれを見てるみたいなさ。

「まあ、何はともあれお帰り和也」

「お帰り和也君」

「お帰り和也」

ああ…帰ってきたんだな、僕。

「ただいま、みんな」

懐かしき故郷に。

3 話目 友人

女の子2人に案内されて、乗り合いして来たっていう武の車を指す。

武は後ろから、俺の荷物全部持ってついて来ている。

「時差ボケもあるだろうし、いいから任せとけてー!」

始めそれを断ったら、そう言い切られてしまった。

昔から、本当にツンデレ気質なんだからな。武ってば。

「でも、みんな急で大丈夫だったのか？」

「大丈夫って？」

小首をかしげる結衣。

「ほら、用事とか…土曜日だしさ」

「逆に、あんたが帰って来るから忙しいっていつか…」

「もう、彩花ちゃん!!!メツ!!!」

この2人は相変わらず仲いいな。

「結衣と彩花は、同じ大学だっけ？」

「そうだよ、花の女子大生 ね、彩花ちゃん」

「…いやらしいこと考えないでよ、和也」

「っう!? 彩花、お前なあ!!!」

考えない方が無理だろ…って、そうじゃない。真っ赤になりそうな顔に、我慢我慢と言いつける。

「だって、和也の鼻の下のびてない？」

「えっ!? 和也君メツだよ!!!」

「だから、違っつて彩花、結衣。勘弁してくれよ!！」

3人で笑いながら進んでいると、後ろから呼ぶ声がした。

「おおーい、お前等行き過ぎてるって。車これだぞ!！」

「あっ、ごめんごめん」

白色のステップワゴンに、荷物を積みながら武が声をかける。

ちよっとお喋りに夢中になっていたようだ。

「そういや、武はいま会社員だよな? 今日、会社は?」

「休んだ」

「えっ、良かったのか?」

「大丈夫だろ、有給残ってたしな」

全く、こいつは…無口でやること大胆な割に、心根は優しいんだ

からな。

だから、いつも損している気がするんだよな。可哀相に。

「あっ！？そついや、アイツは？今日来てないのか？」

「アイツなら、この中にいるよ」

そつ言って、武は彼の愛車の中の、小さな画面を指差した。

4話目〜試合〜

「後半始まってから10分。試合はこう着状態に陥っています。天皇杯の第2回戦、ガンバ大阪対サガン鳥栖の一戦をお送りしております」

「いやあ、サガン鳥栖のディフェンス陣が踏ん張っていますよ。J1でも指折りの攻撃力をもつガンバ大阪に、最小失点で抑えているのですから」

「攻撃でも現役大学生ミッドフィールダー、楠京平が光ります。絶妙なスルーパスを味方フォワード陣に通しています」

「サガン鳥栖の若手、最大の有望株でしょうね」

「そうですね。サガン鳥栖の若手と言えば立花和也を忘れられないファンも多いのではないのでしょうか？」

「疑惑のディフェンスリーダーですね」

「高校生からプロと活躍し、高校卒業と同時にセリエAに移籍しました」

「ええ、チームの経営難を救うためだったのか、本人の意志なのか。どちらにせよ、チームの中心選手を失ったサガン鳥栖は、その年J2で低迷するに至ったのですが…」

「彼が今でも残っていればと、悔やむファンも多いようです」

「まあ、それがサッカーですし。本人には頑張っただけで欲しいものですね」

「さあ、話をゲームに戻しましょう。以前として、ガンバ大阪が終始ボールを保持しています」

「日本代表を揃える中盤ですからね。いくら楠が優秀であろうと、まだこのレベルにはかなわないでしょうね」

「さあ、またガンバ大阪のチャンスです。サイドからいいクロスが上がった！！シュート、いや、ゴールキーパー防いだ！！」

「でも、まだ残っていますよ！！」

「こぼれ球、シュート！！ガンバ大阪押し込んだ！！ゴール、ゴール、ゴール！！」

「いや、見事なシュートでしたね！！サガン鳥栖のディフェンス陣が、がっくり肩を落としています」

「立花和也がいれば…そう思ったファンもいるかもしれませんが」

「後半25分のゴールでスコアは2対1と動き始めました。決めたのはガンバ大阪ミッドフィールダー…」

5 話目 友人？

「……………」

「……………」

「ああ…なんか、ごめん」

車内には、微妙な空気が流れていた。気を利かせたはずが、こんなことになって…武は何とも言えない顔をしている。

「何謝ってんだよ、武。別に気にすることじゃないって」

「いや、でもね…」

気にしない気にしない、と武にそれ以上言葉をつむがせない。

「けど、京平がプロになってたなんてな。いいプレーしてたし。今日のゲームだって、おしかったしな」

「和也が向こう行ってから、一生懸命練習してたんだよ」

参ったか、みたいな顔をする彩花。その横で、結衣がクスクス笑

っている。

「俺が誉めてるのは京平であって、彩花じゃないぞ」

「幼なじみが誉められるのは、嬉しいことなのよ」

そんなもんか？と視線を結衣に向けると、彼女はまたクスクス笑って頷いてくれた。

「しかし、J1チーム相手に1点差か。やっぱり調子いいみたいだな」

「あれ？調子いいなんて、なんで知ってるの？」

「インターネットで試合見てるからさ」

事実、J2でも上位にいて、今年こそチーム初のJ1が狙える位置にいる。

「へえ、あんたがネットねえ……」

「ちょっと、彩花ちゃん」

「何か文句あるのかよ」

「別に。高校時代に携帯のメールも使えなかった男が、進歩したことだこと」

「はっ！！人は進歩するものだよ」

事実、向こうに行ってから祐輔さんに教えて貰ったのは内緒だ。

「…って、あっ！？思い出した。なあ、武？」

「なんだ？」

「頼まれたアレ持ってきたぞ」

「まじか！？」

急にこちらを向いた武に、女性陣から前！！前！！と叱責が飛ぶ。

「アレって何？」

若干…いや、かなり怖い目つきで結衣が聞いてくる。

彩花はその横でニタニタ笑ってやがる。

「別に変なのじゃないよ。ただのサイン入りユニフォームだって」

「ユニフォーム？」

「そう、日本を代表する井上祐輔のサイン入りユニフォームだよ」

「なあ〜んだ、つまんないの」

「あのなあ…彩花…」

彼によって、俺がどれだけ救われたのか。ちゃんと説明しなきゃならないみたいだな。

6 話目く憧れく

彼のプレーを見るのは、ずっと前から好きだった。

サッカー選手なら、一度は憧れたあの漫画の主人公。その一つ一つを再現出来るプレイヤーだからだ。

敵には悪魔のような鋭いドリブル、意表をつくロングシュート。

味方には天使のような柔らかなパスを出しながらも、鼓舞し続けることも忘れない。

「実際には、京平の方が彼のファンだと思うぞ」

「ああ、あいつは筋金入り。俺と武はミーハーだからな」

味方フォワード2人の後ろ。いわゆるトップ下のポジションに入って、味方の攻撃の全権を担う。

それを世界でも有名な一流クラブでやってる。しかも、イタリアやブラジルといった各国の代表選手を退けてだ。

アジア人初のバロンドール候補者だとか、極東の至宝だとか、彼を示す形容詞は数え切れない。

「ふくん、つまり凄い人つてのでいいのよね？」

「ああ、凄い人だよ。彼の活躍のおかげで、俺もあの国に呼ばれたようなもんだしな」

移籍がスムーズにいったのも、彼が日本人は闘える、ってことをあの国で示してくれたから。

ただ、その闘えるの部分が目に見えない大きなプレッシャーとなつて立ちほだかった。

「プレッシャー…敵がくる!!」

「…あと一言でも口開いたら、怒るからな武」

彼らは日本人を全て同じに見た。つまり、当初井上さんを今の日本人プレイヤーの平均値にしたんだ。

事実移籍してすぐに俺は彼、井上さんと同じような活躍を求められた。

元々華麗なプレーを売りにしていない俺は、とことん悩まされた。

彼らはウノゼロを良しとしながら、ファンタジーも試合に求めるのだから。

「ウノゼロ？」

「1対0の試合のことだよ。守り勝つ美学を彼らは持つてるんだ」

小首を傾げる仕草が可愛いな、結衣：つと、ウオツホン！！

守備をしながら、攻撃も出来る。自分をそんなバランスのいいプレイヤーだと思っていた俺は本当に悩んだんだ。

実際には、どちらも中途半端なプレイヤーじゃなかったのかって
ね。

でも、その悩みをといってくれたのが、井上さんだった。

7話目〜試合後〜

「本当に器用だよな。お前って」

初めて声をかけられた日のことは、まだ鮮明に覚えている。

ライバルチーム同士の対決、俺は彼のマークを命じられたが何も出来ずにやられてしまった。

井上さんは1ゴール1アシスト。俺は1枚のイエローカード。試合結果も3対0と手も足も出なかった格好だ。

試合後、気落ちしている俺に対して、彼はこう話しかけてきてくれたのだ。

「えっ！？あつ、井上さん……」

さすがにボコボコにされた相手に、笑顔で挨拶出来るほど俺は大人じゃない。

そんな引きつった顔がおかしいのか、井上さんは口に手を当てながら

「今日これから暇だろ？少し飲みに行こうぜ」

そう誘ってくれた。慣れない異国の地。繰り返されるきつい練習。

そして、そそがれる大きな期待と、それが失望へ変わる瞬間のフ

ァンの表情。

精神的に病んできていた俺は、彼のその言葉に二つ返事で頷いた。誰かと話したい。それも苦手な外国語ではなく、日本語で。正直ホームシックに陥っていたから。

「ははは、意外とノリがいいじゃねえか。それじゃ、後でこの店に来いよ」

彼は店の名と簡単な場所を教えてくれ、待ってるからな、そう俺にウインクしながら呟き離れていった。

「今日はやられたな」

俺と彼の会話が終わるのを待っていてくれたのか、アフリカ人の同僚がそう声をかけてきた。

年齢は34歳で、キャリアも終盤にきつつある彼は、こうやってチームの若手の心のケアまで面倒を見てくれる。

ピッチにたてば、退場もいとわないタックルをかますファイターなのだが。

「なんかアイツに言われてたのか？」

どうやら、少し井上さんと話しこんでいたのを心配されたようだ。ライバルチームのエースに、文句の一つでも言われているんじゃないかと。

「いや、大丈夫です。同じ日本人同士、食事に誘われただけです」

「そうか…行くのか」

心配そうな彼の表情に、少し疑問を抱きながらも

「行くつもりです」

そう答えた。

「分かった。楽しんでこいよ」

彼の表情はまだ浮かないままだったのだが、俺は気にせずハイと答えた。

彼が何を気にしているのか、考えもせずに。

8 話目 イタズラ

「…本当にここであってんのか？」

井上さんに教えられたそこは、もの凄く賑やかなクラブだった。田舎で生まれ育った俺にとって、初めて見る風景。耳をつんざく程の音響に、あられもない格好の女性達。正直強すぎる刺激に、頭が痛くなる。

「やっぱ帰ろう」

こんなところ入ってはいけない。あの時彼が心配したのは、これだったのかと痛感した。きびすをかえした瞬間、俺の肩はぐいと掴まれ、見知らぬ黒人に取り囲まれていた。

「子供がこんな所で何してる？」

でかい…2メートル近くある身長に、鍛え上げられた腕。どう転んでも、俺が勝てる相手ではない。しかも、そんなのが4人もいるなんて…

「ここで何してるか聞いてるんだが？」

「ひ、ひとを待ってるんです!？」

怖い…怖すぎる…やっぱり来るんじゃないかった。

「誰を？」

「サッカー選手の井上祐輔さんです」

「嘘つくな、アイツはもう帰ったぞ」

ええー!!そんなバカな!?!呼び出しといて、いないなんてありかよ…

「怪しいやつめ、一緒に事務所まで来やがれ。取り調べしてやる」

「ごめんなさい、ごめんなさい!!すぐ帰りますから勘弁して下さい」

ついてない。やっぱり来るんじゃないかった。そんな泣きそうな俺の肩を掴み無理やり前を向かせた彼らは

「はい、チーズ!!」

一台の車に向かってピースサインをしてる。

(何で?何で?何でなの?)

そして、大声で笑いながら、ソーリー、ソーリー、と頭を下げ離れていった。

(もしかして...)

俺は今し方、シャッター音を響かせた車に近づいた。そこにいたのは、やっぱりと言うかなんと言うか...

「井上さん...」

ニヤニヤ笑う、尊敬していた人だった。確かに、イタズラ好きだつて雑誌なんかで見たことあったけど。ほぼ初対面の人間にここまでするなんて

「ようこそ、世界一のカルチヨの国に!!」

全く...年上の彼のあどけない笑顔に、何も言う気がなくなっ

まった。

「歓迎にしては、ちょっと意地悪くないですか？」

「なに言ってるんだ。この国一のボディガードまでつけてやったのに。おかげで、こんないかがわしい店の前でも絡まれなかったろうが」

「こんないかがわしい…って、知ってるなら指定するなよ！！てか、この国一のボディガード？」

「さっきの人は…」

「オーナー、国で一番偉い人を守る人達だな。アメリカの要人専用SP出身って言った」

大統領おかかえかよ、なんでそんな人ら動かせるんだよ…

「まあ、細かいことは抜きにして飯に行こうぜ。この先にまともな日本食が食える店があるからさ。早く乗れよ」

「分かりました…もう、今日みたいなのは勘弁して下さいよ」

「……………覚えてたらね」

絶対また何かやられることを確信した和也だった。

9 話目〜苦悩〜

「はあ〜、ごちそうさまでした」

久々の日本食。白米に味噌汁に天ぷらに、鳥のテリヤキっぽいソースがかかったやつとか、出てくる料理全てが美味かった。

慣れない異国の地。慣れない食文化。こう素直に美味しいと思いつながら飯を食べたのは、久しぶりな気がする。

この店を教えてもらっては、さっきのイタズラを帳消しにしても、お釣りがでるくらいありがたいと思う。

「どうだ、美味かっただろ？この店は俺もよく使うんだよ。米を食いたくなったらさ」

「はい、めちゃくちゃ美味かったです！！」

お世辞抜きでそう言えた。やっぱりこの人も、日本人なんだな。

「やっと笑った顔が見れたな。さっきまでのお前は、悩んでいます、助けて下さい〜、みたいな顔してたのにさ」

「えっ？」

今、俺はきつとアホみたいに間の抜けた顔をしてるんだろう。それぐらい驚いていた。

「そうハトが豆鉄砲くらった顔をするなって。試合中から気になつてたんだよ。お前のプレイには迷いがあるかなら」

迷い… そうだ、この人の言うとおりだ。俺は正直迷っていた。

この国では、俺はファンタジスタとして生きていける程のテクニクもない。

かといって、今まで武器にしてきたのはテクニク…ドリブルやパスの正確さであつて、スピードの必要なサイドアタッカーにもなりきれない。

だから、体をいじめ抜いて筋肉の鎧をまとつた。攻撃ではなく守備で、試合に貢献できるように。

「…確かに、お前の考えは分からないでもないな。こつちじゃ、結果が全てだからさ」

彼は抹茶パフェを頬張りながら、話を聞いていた。食後のデザー卜らしいが、なんともしまりのない光景だ。

(ちなみに、俺の前にはみたらし団子が置かれている)

「でも、お前は今まで人に指示を出す立場。人を使う立場だった。

それがいきなり使われる立場になりゃ、戸惑いもするよな」

「…ええ」

頬にクリームついてるよ、井上さん…

「社長がいきなり平社員になったら、混乱するみたいなものだろ？なら、考え方を考えてみるよ」

「考え方ですか？」

藁にでもすがりたい俺は、彼の言葉を一字一句聞き逃すまいと真剣な顔で見つめた。

「つまりだな、ポジションをもう一個下げるんだよ」

「俺にディフェンダーになれと言っんですか！？このリーグで、しかもうちのチームでディフェンダーに転向したら、それこそ試合に出れなくなりますよ…！」

うちのチームのディフェンダー陣は、代表クラスがひしめくチームで一番層の厚いポジションだ。

そんなところに転向したら、今よりもっと試合に出れなくなるの

は明白だ。しかも、生まれてこの方ディフェンダーなんてやったことがない。

「だから、考え方を変えろって言っただろうが。お前が普通のディフェンダーになっても、並みぐらいだったのは俺だって分かるよ」

「じゃあ、なんでポジションを下げろなんて言うんですか？」

分からない、俺はまたからかわれているのだろうか？
そんな俺を見て、この人はニヤリと笑った。

「全く、若者は答えを焦りすぎるな。お兄さんが教えてしんぜようではないか」

不適な言葉とともに…

10 話目〜司令塔〜

「そもそもお前は、司令塔ってどういうポジションだと思っよ？」

「味方フォワードに決定的なパスを出す人ですよね」

間髪入れずにそう答えたが、彼は違つと首をふつた。

「それじゃ、イタリア屈指の司令塔であるピルロは違つたというのか」

「えっ…いや、でも…」

「まあ、いいさ。ファンタジスタ、トレクアルティスタ…そういうフォワードの近くでプレーする選手は派手だし、分かりやすいけどな」

トレクアルティスタ、イタリアでいうトップ下のポジション。キヤテン翼という翼君のポジションのことだ。井上さんもこの中に入る。

対して今の俺は、ボランチ。それも、アンカーという南アフリカW杯の日本代表でいう阿部さんの位置。守備に重きを置く役回り、こっちはインコントリストと言っらしい。

「お前は俺みたいにスピードもなければ決定力もない。ピルロみたいなゲームメイク力もない。かといって、純粋なインコントリスタじゃないから危機察知能力もない」

「ないない尽くしじゃないですか…」

そこまではつきり言われると泣きたくなる。

「でもな、正確なロングパスの能力といかついフォワードに負けないフィジカルがあるだろ？なら目指すポジションは一つだよ」

「全く想像つかないんですけど」

ミッドフィルダーの前目でも後ろでも、左右でも中央でさえも使えない。そんな選手に居場所なんてあるのだろうか？

「リベロだよ」

「リベロっすか？」

ベツケンバウアーとか、いまから40年前の選手がやってたポジションだよな？そんな時代遅れのポジションが俺の目指す所だって？

「でも、井上さん。俺のチームにはリベロなんておいてないですよ。それに今時リベロなんて…」

リベロ、それは『自由』の意味を持つ。特定のマークする人物を持たないディフェンダー。今では、そんなポジション置けば相手フォワードに好きなようにやられてしまう。

「だからだよ。お前だけのオリジナルを持つんだ。中盤なんか無視したロングパス。それもベツカムぐらい正確なら、フォワードがしっかりしてるチームなら使わないはずがないだろ」

ベツカムって…そんなむちゃくちゃな。世界最高峰のロングパスじゃないかよ。

「そんなの、俺には…」

「出来ないなら、日本に帰れ。ここは中途半端なやつが通用する場所じゃない。派手なプレーも少なければ、華麗なパスワークも少ない。世界一の戦術家が集まる場所なんだ」

涙が出てきそうになる。それくらい今の井上さんの言葉は厳しく、ピッチ上で見せるような力強さを感じる。

「分かりました。それしかないのなら、俺は…頑張ります」

そう話すと、ニッコリと笑ってくれた。久しぶりの笑顔だな。

「ようこそ、SERIE Aへ。未来のスーパースター!!」

それが、俺がイタリアでポジションを勝ち取れた理由、井上さんに頭が上がらない理由だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4158/>

帰郷

2011年10月9日23時54分発行